

令和 8年 3月31日

釜石市議会議長
千葉 榮 様

公明党 山崎 長栄

会派視察調査報告書

当会派所属議員による視察調査を下記の通り実施しましたので報告致します。

1. 視察項目：筑波海軍航空隊記念館および地下戦闘指揮所の施設見学について
日 時：令和8年3月22日（日）13：45～15：45
参加者：公明党 山崎長栄 細田孝子
視察先：筑波海軍航空隊記念館・地下戦闘指揮所

筑波海軍航空隊記念館は、茨城県笠間市にある日本最大級の戦争遺構を活用した史料館である。1934年に開隊された海軍航空隊の司令部庁舎が当時のまま残されており、映画「永遠の0」のロケ地として知られている。筑波海軍航空隊は、1934年に戦闘機の教育部隊として「霞ヶ浦海軍航空隊友部分遣隊」が開設され、1938年に「筑波海軍航空隊」と改称された。ここでは、戦闘機パイロットになるための実機訓練を担っていたが、絶対国防圏策定後の1944年以降、本土防空部隊となり、戦争末期には特別攻撃隊（神風特攻隊）が編成され、特攻作戦の訓練も行われる。「筑波海軍航空隊」へ入隊した予備学生は120名。その内、特別攻撃隊（神風特攻隊）として戦地に出撃したのは77名、うち戦死者は60名とのことである。

地下戦闘指揮所は、1945年2月に出来た地下要塞である。戦況が悪化し、筑波海軍航空隊に本土防衛を目的とした戦闘機隊基地の役割が課せられるようになった際、基地全体の要塞化と共に地下戦闘指揮所が建設された。約3kmもの基地内外の地下通路もこの時期に整備されたと考えられている。

研修内容

- 第二次世界大戦の終戦から80年を迎えた今なお、世界では戦争が起きている。二度と同じ悲劇を繰り返さないためにも、日本最大級の戦争遺構を活用した史料館である筑波海軍航空隊記念館等を見学し、悲惨な史実と平和への伝承について学ぶ。館内には、「零戦」二一型の後部尾翼の展示を始め、特別攻撃隊員の写真や入隊時の覚悟、国を守るとの使命感が伝わってくる遺書・遺品など、筑波海軍航空隊に関する当時の資料が様々な形で展示されている。「特攻のはじまり」と題した映像では、特攻の歴史と生存した特別攻撃隊員のインタビューが収録されており、隊員の複雑であり真実の想いを垣間見ることが出来た。

地下戦闘指揮所は、文字通り地下に設置された施設。表面的には土が盛られ、植栽がなされるなどカモフラージュされており、あの場所に、あのような戦闘指揮所が存在することは全く想定が困難ではないのか。高さ約2mの穴を掘って造られた坑道を進んだ中には、木枠を組み鉄筋を配してコンクリートの部屋を作った上に、石や砂利を混ぜた土を挟み、更にコンクリートで補強した二重構造の建築物。中には、2本の通路が有り、その間には、作戦会議等に使われた大部屋2部屋と小部屋3部屋があった。他に通信室が有り、発電機や通信機・配電盤などが置かれ、現在もその痕跡が残っていた。有事の際の脱出路を兼ねていた地下トンネルは、全長2.2kmのうち、約半分が当時のまま現存しているとのことである。

所 感

○神風特攻隊は、半ば知っているつもりでいたが、この度の視察を通し、初めて知る史実も多く、感慨深い思いに浸る。純粋で有能な若者達が、桜花隊に自ら志願し、国のためにと命を賭け、散っていった史実を、我々国民は忘れ去ってはならない。また、大日本帝国海軍が開発した特攻兵器（人間爆弾）は、実用化された世界唯一の存在とも言われていることや、人の命を武器として考えてしまう誤った思想への深い反省など、後世に継承して行くべき必然性を強く感じ取った。

地下戦闘指揮所では、地下要塞に入り当時を体感することが出来たり、記念館では、当時を知る方々の映像による貴重な証言を拝聴出来るなど、多くのことを解りやすく学ぶ機会となった。また、来館者に若者が多かったことも印象的であった。



筑波海軍航空隊記念館



旧司令部庁舎



零式艦上戦闘機 21 型後部胴体



神雷部隊の構成



映像「特攻のはじまり」



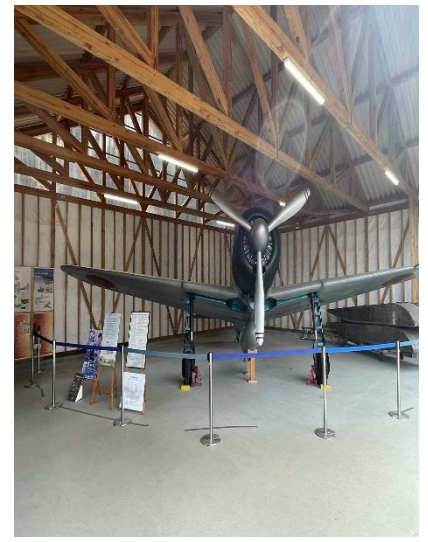
地下戦闘指揮所の見取り図



地下戦闘指揮所の外観



地下戦闘指揮所出入口



映画で使用した
零戦の実物大模型

2. 視察項目：水戸市平和記念館の施設見学について

日 時：令和8年3月23日（月）10：00～11：00

参加者：公明党 山崎長栄 細田孝子

視察先：水戸市平和記念館

水戸市平和記念館は、水戸駅から程近い場所にあり、街角記念館として市民に親しまれている。水戸市は、昭和20年8月2日未明に起きた空襲により市内の約8割が焦土と化し、300名を超える犠牲者を出している。一方、終戦から歳月が流れ、戦争経験者が高齢化し、減少する中に於いて、悲惨な戦争の記憶を風化させてはならないとの懸念から、市制施行120年の佳節に平和記念館を開館されている。館内では、空襲による被害状況や、戦時中の市民の生活などについて、当時の品々やパネルを展示し、戦争の悲惨さと平和の尊さを伝えている。

研修内容

○第二次世界大戦終戦から80年を迎え、当時を知る戦争経験者が減少する中に於いて、如何に戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に語り継ぐための施策を行ってきているのかを学ぶ。記念館の整備は、市制施行120年の佳節ということもあるが、そもそもきっかけは、市民有志による戦争被災者への情報収集が始まりと伺った。市が当初示した被災者数は242名。その中に友人の名前が無く、未だ掌握されていない方がいるのではないかという疑問から、当時80歳以上の有志が被災者家族等を捜査・取材し、結果、302名の犠牲者がいることが判明した。これを基に市に対し、平和記念館の整備を要望し、開館に至ったとのことだった。館内には、戦災当時の写真を始め、戦災体験談を紹介したパネルや、映像などもあり、大きな施設ではなかったが、焼夷弾の脅威等、戦争の恐ろしさが肌を感じられる。また、当施設が整備されるきっかけとなった市民有志の方々の活動が記録された映像（NHKが17年前に放送したもの）も視聴することが出来る。その他、水戸市では、戦争体験者が小中学校に出向いての講演や、市民向けに戦場カメラマンによる講演など、平和についての伝承活動を行っている。

所 感

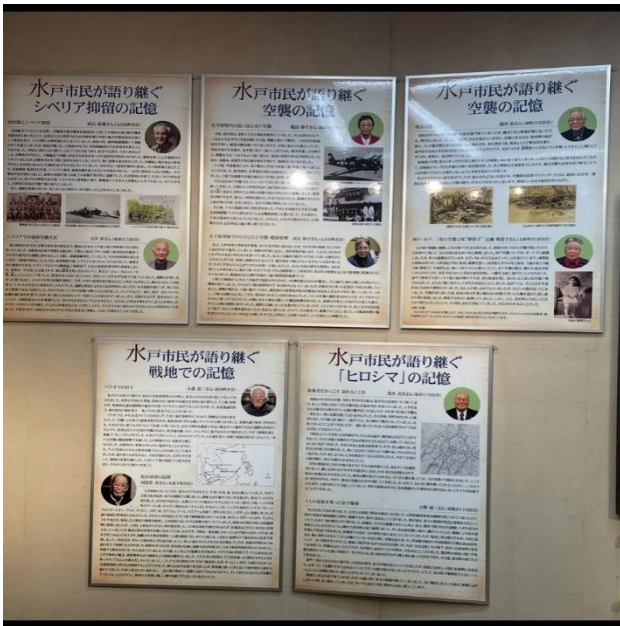
○終戦から80年を迎える。被災された自治体に於いては、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に対し、どのように伝え残していくべきか大きな課題ではないだろうか。当市は、艦砲射撃を2度経験し、甚大な被害がもたらされた。郷土資料館には、当時の状況を伝承する物品の展示や、体験集等はあるが、残念なことに、映像による記録と証言は残されていない。今後、市が取組む平和教育の一環として、戦災の史実と経験を戦災体験者がご存命のうちに、映像で残しておくべきでは無いだろうか。



水戸市平和記念館



平和作文コーナーおよび戦災体験者の証言



水戸市民が語り継ぐ記憶



平和都市宣言および平和へのメッセージ

報告者 細田孝子・山崎長栄